

言語文化演習（アジアから見た日本）く共感力とは？従軍慰安婦問題を例に

一、従軍慰安婦問題をどう考えるか

Q 次の記事は、韓国側の従軍慰安婦問題に関する発言について、安倍首相がかつて講演で行った発言の一部を紹介したものです。あなたはこの意見についてどう考えますか。

（安倍晋三・元首相）「韓国側から従軍慰安婦問題の解決が優先事項という発言があった。これはとつくのとうに解決済みの問題。こんなことになってしまったのは（日本が）善意を示したから。善意は弱さになるんです。残念ながらそれが国際社会の常識です。」

発言録（朝日新聞二〇一一年二月一八日朝刊）

二、在日朝鮮人元従軍慰安婦の証言

合格 「世界館」で刻まれた名、消えず（記憶…上）／宮城

朝日新聞二〇〇一年八月一四日朝刊宮城面

十六歳で船に乗せられ中国へ。慰安婦の仕事とはだれも知らされず：

昨年十一月、ある控訴審判決が言い渡された。在日朝鮮人としてただ一人、慰安婦だったと名乗り出て国に謝罪と賠償を求めた県内在住の宋神道（ソンシンド）さん（七八）に対し、東京高裁は請求を棄却した。宋さんは言う。「歴史は変わらない」。その「歴史」とは何だったのか。宋さんは上告し、裁判は最高裁で争われる。判決後、初めて宋さんが口を開いた。（三浦英之）

そこは「世界館」と呼ばれていた。れんが造りの建物。1階に帳場、炊事場、食堂があり、二階には三畳の部屋が十五ほど並んでいた。慰安婦は十数人いて、みな、朝鮮人だった。

当時十六歳だった宋さんは二階に上げられた。そこには軍医がいて、台の上に寝るよう指示された。この「検査」に通らなければ「働く」ことができないと聞かされていた。

腹の上にカーテンが引かれた。脚を開き、軍医は作業を始めた。宋さんはまだ初潮を迎えていなかった。体は「検査」を受け入れなかった。怖くて、悲しくて、宋さんは泣き叫んだ。軍医は「もういいや」と言い、しりをたたいた。

「合格」

その晩、一番最初に部屋に来たのは、昼間、検査をした軍医だった。

*

宋さんは一九二二年、韓国中西部の論山で生まれた。十六歳で結婚。しかし、知らない男と結婚させられたのがいやで飛び出した。知人の家を転々としていた時、朝鮮人の婦人に「戦地に行けば金がもうかる」と誘われた。十代の女性もいるという。「みんなが行くのだから怖くないだろう」と思った。客船に乗せられた。女性は七、八人いた。一行は揚子江をさかのぼり、武昌に向かった。慰安婦という仕事はだれも知らされていなかった。

そこで何をするのかは体で覚えさせられた。性病の検査が終わった数日後、兵隊たちが宋さんに殺到した。部屋に入ると無理やり犯した。抵抗すると刀を抜いて「殺す」と脅し、容

赦なく殴った。逃げようと思っても道が分からない。見つかつて連れ戻されれば痛みを感じなくなるまでたたかれた。狭い所に入れられ、食事も与えられない時もあった。衰弱しきつたところで連れ出され、「今日から兵隊さんの言うことを聞くんだぞ」と教え込まれた。

*

入場は切符制だった。隊員は帳場で慰安婦を指名し、切符とサック（コンドーム）、ちり紙を受け取って部屋に入った。朝から午後五時までが一般の兵隊。午後八時までが下士官と士官。そのあと深夜までが将校、と時間が決められていた。

生理であろうと病気であろうと休むことは許されなかった。生理の時には自分で脱脂綿を丸めて詰め、相手をした。

一日に五、六人。通過する部隊があるときは七十人ぐらいと性行為をさせられた。順番待ちの兵隊が「早くしろ」と扉をたたく。部屋の外でマスターベーションをする者もいた。

*

ある慰安婦は消毒薬を飲んで自殺した。また別の慰安婦は、体の調子が悪いと断った兵隊に石を投げつけられて殺された。手投げ弾で隊員と心中した慰安婦もいた。兵士は骨になつて祖国へ送られたが、慰安婦はそのまま土に埋められた。宋さんはどうしても死にたくなか

った。

しばらくすると兵隊から「金子」と名前を付けられ、左腕に入れ墨をさせられた。恥ずかしくて針を刺し、墨を出そうとしたが、消えなかった。

「父ちゃん」 やっと出会えた、でも夢に慰安所（記憶：中）／宮城

朝日新聞二〇〇一年八月一五日朝刊宮城面

部隊と一緒に戦地を転々。妊娠しても死産。生まれた子も他人に引き取られ

慰安所では、梅毒などの性病が伝染しないようサック（コンドーム）の使用が義務づけられていた。サックが足りなくなると宋神道さんたちは洗って使った。サックを使いたがらない兵隊も多かった。「もうすぐ弾に当たって死ぬから」というのがその理由だった。

*

初めて妊娠したのは中国・武昌の慰安所だった。だが、休むことを許されず、7カ月で死産した。自分一人をやつとの思いで子どもを取り出すと、ブドウ色になっていた。

2 回目の出産は、漢口の海軍の慰安所に移ってからだった。妊娠中ということで洗濯などの雑用をやらされたが、慰安所では育てることができない。子どもは他人に引き取られていった。

体力が戻ると再び慰安婦に戻された。岳州の慰安所に移され、そこから部隊と一緒にトラックに乗って長安、応山、蒲圻などの戦地を転々とした。

戦場にはまともな慰安所はなく、ざんごうなどに毛布を敷いて、そこで性行為を強いられた。砲弾が飛び交う中で相手をさせられたこともあった。恐ろしくて逃げ出そうとしても、髪を引っ張られて殴られる。

そんな暮らしが七年ほど続いた。宋さんは二三歳になっていた。そして日本が戦争に負けた。

*

しかし「戦争」は終わらなかった。日本軍に放置された慰安婦たちは路頭をさまよった。中国人と結婚したり、身売りをしたりする者も現れた。

宋さんは終戦を迎えた咸寧で、「一緒に日本に帰ろう」とある元兵士に結婚を申し込まれる。朝鮮に帰りたいとは思わなかった。日本を目指した。しかし四六年、引き揚げ船が博多に着

くと、元兵士は「結婚する気などない。アメリカ人の兵隊でも相手にしている」と言つて去つていった。引き揚げのために夫婦を装つただけだったのだ。

頼れるものを失つた宋さんは、大阪の長靴工場で働いた後、元兵士の実家の埼玉県に向かった。しかし、元兵士は「まだ日本にいたのか」と石を投げつけた。宋さんは絶望して東北線に乗った。そして石越付近で自殺を図り、列車から飛び降りた。

*

気が付くと朝鮮人農家の納屋にいた。胸を打つたものの、命に別条はない。「朝鮮のおなごがどうしてこんな姿に」。理由を聞かれたが、答えられない。服はボロボロ、頭はシラミだらけだった。

農家は、県内で労働者の宿などの手配をしていた朝鮮人の男性を紹介した。宋さんはその人を訪ねることにした。



宋神道さん（송 신도、1922 - 2017）

男性は、ただ泣いてばかりいる宋さんの頭のシラミを一つずつ取り、温泉に連れて行って皮膚病を治してくれた。「やっと、やさしい気持ちの人に出会えた」。そして二人の生活が始まった。約四十年間、二人は道路に敷く枯れ木をとったり、子守を引き受けたりして働いた。宋さんは男性を「父ちゃん」と呼ぶようになった。

しかし、性交渉は一度も持てなかった。慰安所の話も一切しなかった。それなのに慰安所は毎日夢に出た。日本に行こうと誘った元兵士も出てきた。記憶はいつまでも消えることがなかった。ふろに行くたびに、左腕の入れ墨が心をえぐった。

力 体験語る言葉、人々を引きつけた（記憶…下）／宮城

朝日新聞二〇〇一年八月一六日朝刊宮城面

日本に住む朝鮮人の子どもと日本人の子どもが仲良くするために
市民団体が開設する「慰安婦一一〇番」に匿名の電話がかかってきたのは、九二年のこと
だった。

「宮城県に元慰安婦の女性がいます」

それが宋神道さんだった。その時六九歳。三十数年連れ添った「父ちゃん」は十年ほど前
に亡くなり、生活保護を受けながら犬と暮らしていた。

*

身内はない。日本語も読めない。孤独な生活を強いられていた。生活保護の申請に行く
「スパイで（中国に）行ったんじゃないか」と疑われたりした。

ある女性が家を訪ねると、宋さんはその前年に韓国の元慰安婦が起こした裁判について知
りたがった。自分と同じ境遇の人が元慰安婦を名乗り出ている。思いを抑えきれなくなっ
ていた。「金はいらない。日本に謝ってもらっただけでいい」

弁護士が宋さんに会った。「勝てるかどうかわかりません」という弁護士に、「勝とうと思
っているんじゃない。『日本の癖』を直さなきゃいけないんだ」と言った。

弁護団が結成され、「強制労働を禁じた国際労働機関条約違反」などを根拠に日本政府に謝
罪を求める裁判が起こされた。宋さんは名前や顔を隠さなかった。

裁判は難航した。裁判所が謝罪請求だけでは裁判を続けられないとの見解を示した。宋さ
んは「金は目当てじゃない」と受け入れない。強姦事件などで支払われる賠償金を基に宋さ
んの賠償額を計算すると七六八億円にもなってしまう。弁護団は賠償額を一億二千万円に絞
って裁判を続けた。

*

口頭弁論は困難を極めた。初めて犯された場面や、出産した子どもを他人に譲り渡した心
境を尋ねられるたびに、「もう聞かないでくれ」と苦しんだ。そんな弁論が約二十回も続いた。
周囲が驚いたのは、宋さんの言葉に不思議な「力」があることだった。人前で話したこと
などないのに多くの人が引きつけられた。荒っぽい口調で語られる世界に、若者が涙ぐむ。
市民集会は五十回を数え、参加者は一万人を超えた。

しかし東京地裁は「個人が国家に賠償請求を求める国際慣習法は当時存在しない」とし

て請求を退けた。宋さんは控訴した。そして昨年10月、宋さんと弁護団は2度目の最終意見陳述に立った。七八歳になっていた。

傍聴席は満席だった。

「慰安所で七年、日本に来てから五十年以上、私は日本人の中で暮らしてきました。日本人と気持ち良く付き合いたいと願い、努めてきました。あと何年生きられるかわかりませんが、日本に住む朝鮮人の子どもと日本人の子どもが仲良くするためにも、過去の過ちはきちんと反省して、申し訳なかったと謝罪してほしいのです」

こみあげる感情をことばにしていく。



晩年の宋神道さん

「裁判を始める前は恥ずかしくて慰安婦のことはだれにも言えませんでした。でも裁判を始めてからは、本当にたくさんの方の前で体験を話しました。信用してもらえる心配でした。でも、みんな心から聞いてくれました。私が慰安所に連れて行かれた年ごろの子どももいました。そんな子どもでもちゃんと意味をとって涙を流してくれました。あんな残酷な戦争は二度と繰り返してはいかないです」

＊

「裁判長」

静まりかえる廷内に声が響いた。

「慰安婦問題を子どもたちの時代にまで持ち越さないように、勇気を持って判決を出

してください。裁判長が政府にきちんと言ってくれなければ本当に頼るところがないんです。今でも隠れているほかの慰安婦のためにも、血の通った判決を出してください」

弁論を終えると裁判長に頭を下げた。傍聴席から拍手が起こった。裁判長が制止したが、拍手は鳴りやまなかった。

東京高裁は昨年十一月三〇日、請求を棄却した。宋さんは数日後、最高裁への上告を決意した^①。

①最高裁第二小法廷（北川弘治裁判長）は、二〇〇三年三月二十八日、一、二審で全面敗訴した宋神道さんの上告を棄却する決定をした。これにより日本政府による公式謝罪や損害賠償を求めた宋さんの敗訴が確定した。

三、共感力とは？

Q 宋神道さんの証言を読んで、前掲の安倍首相の発言について、あなたの考えは変わったでしょうか。

(安倍晋三・元首相)「韓国側から従軍慰安婦問題の解決が優先事項という発言があった。これはとつくのとうに解決済みの問題。こんなことになってしまったのは(日本が)善意を示したから。善意は弱さになるんです。残念ながらそれが国際社会の常識です。」

発言録(朝日新聞二〇一一年二月一八日朝刊)